［一九九七年度河上肇記念会総会での講演］

日本経済学史の上に占める河上肇の位置

小林漢二

（講師紹介　池上　惇）

講師の小林先生をご紹介申し上げます。本日ご講演いただきます小林漢二先生は東北大学で服部英太郎という社会政策の先生の教えを受けられた方でございます。私の先生は島恭彦先生ですが、当時島先生は夏になると愛媛の方へ集中講義に行っておられまして、そこに河上ファンの一人である星島一夫先生という社会政策の先生がいらっしゃいました。この星島先生が後継者がいないと言って当時大変悩んでいらして、全国行脚して探すんだとおっしゃって、ついに見つけられたのが小林先生でございます。また小林先生は私の古くからの友人でございまして、友人と言っても先輩なのですが、小林先輩が愛媛にお越しになった時、若い者同士でしたので、いろいろ愛媛の美味しいものとか、あちらこちらの文化的なものをご紹介いただいたわけでございます。

先生は社会政策一筋と申しますか、河上先生の科学的研究の側面を引き継いだ方でございます。河上先生はご承知のように科学的側面と、ある意味でロマン的側面がございまして、研究者によりましてそれぞれ重点の置き方が違う方もおられるし、両方を重視される方もおられるし、その意味では河上先生というのは多面的な豊かな方でございます。一方では共感を呼びつつ、他方では科学的理論では先生ほど激しく評価の別れる方はございませんし、また、本日小林先生がお話しされる内容につきましても激しく論争されている問題をご報告いただけると思います。大変期待をしている次第でございます。先生

は東北大学経済学部を卒業され、修士・博士課程から、そのころ服部英太郎先生のご指導を受けられたようでございます。服部先生のご著書は私どもにとりましても共通財産でございまして、ドイツ社会政策に関する最も卓越した透徹した書物であるということで、学生の頃からよく読まされました。先輩たちの推薦で、「大河内一雄などというのはろくな事を書いていないけれども服部英太郎はいい」といったふうに言われており、服部英太郎というのは凄い人でありまして、後に確か福島大学の学長にもなられたかと思います。大変大きな影響を我々にもいまだに残しておられる方でございます。

小林先生は御卒業のあと帝京大学経済学部の専任講師をお勤めの後に愛媛大学へお越しいただいたわけでありまして、そこで学部の将来計画とか評議員とか、なにしろ大学も厳しい所でございましたので、いろいろとご苦労もなさいました。

また地域社会で、当時星島先生もそうだったんですが、河上先生がもし生きておられたら恐らくそうされたであろう地域を歩きながら研究するというスタイルを確立されたのが星島先生、小林先生でございます。その中から地域の様々な住民生活に実態から理論を見直すという視点を一貫して持って来られた方でございます。

この著書（注　小林漠二著『河上肇』）を見ても非常に理論的な書物でございますけれども、しっかり地についておりまして、現代の貧困、あるいは現代の社会問題というものを踏まえて深い思想的考察をするという所で一貫して来られた、その意味では愛媛大学の社会政策学派でございます。

つい先頃愛媛大学の法文学部で定年を迎えられまして、現在吉備国際大学の教授でございます。では先生、よろしくお願い致します。

ただ今、池上先生からご紹介を頂きました小林でございます。まことに過分なご紹介を賜わり、恐縮いたしております。今年の春、杉原四郎先生—残念ながら杉原先生には、まだ拝眉の機会を得ていないのですが、私のやっていますことが日本の経済思想史と大変関係の深いものですので、これまで、論文が刷り上がる度にお送り申し上げ、ご指導を賜わって参りました—その杉原先生から、「河上肇記念会の総会で、何か話をして欲しい」というお手紙を頂戴いたしました。何しろ日本経済思想史の大家であり、心ひそかに私淑申し上げてきた先生からのお話でしたので、その時は深く考えもせず、即座にお引き受け申し上げたのですが、この度こちらにお伺いする段になって、「これはとんでもない仕事をお引受けしたものだ」と改めて己の「身の程知らず」さを悔やんだ次第です。

と申しますのは、本会の会長でいらっしゃる木原先生、先ほど紹介の労をお取り下さった池上先生は、私が愛媛大学におりました時から諸種ご指導を賜わってきた方であり、本日ご出席の皆様は、先ほどの自己紹介からも判りますように、いずれも錚々たる研究者もしくは河上博士を親しく存じ上げていらっしゃる方々ですので—その

ような事は本会の性質を考えれば、最初から判っていた筈なのですが—そうした方々を前に、河上博士について何かお話をするということがいかに大それたことであるか、実は、今も思い返しているところです。

と申しますのも、私は実は社会政策を専攻する者でございまして、いわゆる「河上研究者」ではございません。実際、私が河上博士の問題と取り組むようになりましたのは、わが国における社会政策理論の展開過程を明治・大正と追跡してゆく中で、どうしても河上先生の理論変遷の過程を回顧することが必要になったからでして、私の問題意識からいいましても、また、河上博士の問題に取り組んだ時間（一九八八年から九四年まで）からいいましても、とても河上博士のお人柄なり、生き様なりに何か新しい印影を付け加える—たとえば昨年の総会では、同じ愛媛大学教育学部の松野尾先生が、河上博士と住谷悦治先生の学問的交流の姿をつぶさに紹介されながら、河上博士の人物像に新たな彫琢を施された訳ですが—というような事は、能力不足で、到底その任に在る者ではございません。

それであれこれ考えました結果、本日は「日本経済学史の上に占める河上肇の位置」を考える際、これまで余り取り挙げられることがなかった二、三の点を、話題提供という意味でご紹介申し上げ、色々ご教示を得ることにいたしました。大内兵衛先生ではありませんが、この後すぐ申し上げますように、河上博士に関する私の勉強は、どちらかというと「日本経済学史の上に占める河上肇の位置」を確定するという性質のものに属しますし、話題提供ということであれば、本日ご出席の並いる河上研究者に突っ込まることもあるまい、と考えた訳でございます。

そこでまず、なぜ私が河上博士の問題に首を突っ込むようになったのか、その仔細を本日の話題の背景として、レジュメの「問題意識」に添い、ごく簡単に、シェーマティックにご紹介させて頂ければと存じます。

ご承知の通りわが国における経済学の研究は、後発資本主義国における学問・研究の常として、まず海外から既成理論を導入＝解釈し、それを日本に適用するということを通じて理論的な力量を培い、主体的な研究能力を高めて、昭和初期にまずマルクス経済学が日本の経済学として科学的に確立いたします。そのようなわが国における経済学研究の発展構造を社会政策理論の領域において確認したいというのが、社会政策を専攻するにいたった理由でございます。ドイツ社会政策学の輸入に始まり、そのドイツに先駆けて社会政策の科学的理論を産み出したわが国社会政策理論の発展構造を明らかにすれば、戦後社会政策理論の新たな発展傾向—私が大学院に在籍していた頃は、すでに社会政策論争が下火となり、労働経済学への旋回が決定的となって、社会政策論の危機が叫ばれ始めた時期でした—を批判的に検討する視点が得られるのではないか、と考えた訳です。

しかし、実際に勉強を始めてみますと、この仕事—問題が、実はきわめて構造的な分析視点・方法を必要とするもので、マルクスが『剰余価値学説史』、シュンペータが『資本主義分析の理論』で採ったようないわゆる理論史的な方法—最も科学的もしくは完成したと思われるある特定理論を措定し、過去の経済諸理論を、これに向かって自己完成的に展開して来たものとして整序・評価する—は単純には採り得ないということが判って参りました。

第一は、わが国では経済学が転倒的に展開している、ということでした。大変乱暴ですがシェーマティックに整理しますと、すでにご承知のように、ドイツでは経済学は、まずマルクス経済学があり、これに対抗して新歴史学派の経済学が展開した後、両者への批判として限界効用理論または均衡理論が現れるという順序で展開しましたが、わが国のそれは、全く逆に、まず新歴史学派経済学が盛行した後、限界効用理論または均衡理論が導入され、その後マルクス経済学の研究が盛んになるという順でしたし、最後のマルクス経済学にしても、マルクスの著作が入って来る前にイギリスの産業社会主義やベルンシュタインの修正主義、カウツキーやヒルファーディングらの社会民主主義経済学が導入され、その後マルクス経済学が科学的に定立するという順序でした。つまり、わが国の経済学の歴史を理論史的に考察する場合、われわれは二重の意味で、ポスト・マルクスの問題をプレ・マルクスの問題として扱わねばならないという訳です。これが第一の理由です。

理論史的考察を難しくしている第二の理由は、明治期のすぐれて国家主義的・政策的な経済学研究の視点が、政策研究を主・理論研究を従とする跛行的な研究姿勢を生み、それが、方法—系譜を異にする経済諸理論を安易に接合するといった折衷的な理論研究の姿勢となり、〈雑種〉理論を産み出していたことでした。『社会主義評論』において、河上博士が激しく批判した金井延博士

や田島錦治博士の教条的＝「翻訳的」で原則論的な研究姿勢は、前者の例であり、マルクスの「剰余価値」を「剰余価格」と読み替えて限界効用学派の市場理論に組み込まれた河上博士の「剰余価格ノ成立」は、その後者の例にほかなりません。大内先生が『経済学五十年』の中で回想されているような当時の大学内の学問的雰囲気―「自分が学生の頃は、ヨーロッパでは方法論争が激しく行われていた頃であるが教授たちからそのような話を聞いた覚えが全くない」―は、こうした「植民地」的な研究姿勢に因るものと思われますが、

しかしながら、このような転倒的で跛行的なわが国経済学の展開過程、その基になった国家主義的・政策的な経済学接受の視点は、福沢諭吉が『文明論之概略』の中で説いたような明治維新の理念―目的をこの「国の独立を守る」という一点に定め、「制度なり学問なり、商売なり工業なり」を「悉皆」この「目的を達成する術として」輸入すべし―や、この理念に基づく維新政権の強権的な政治指導―第一条に学術・研究の国家目的への従属を規定した「帝国大学令」の公布（明治十九年）は、その教育面での現れといってよろしいでしょう―を直截に反映したものですから、なぜわが国経済学の発展が政策学から経済理論へという過程をたどり、経済理論の発展が理論の折衷となって現れたかという理由は、これを日本資本主義の発展過程と対応させた時、初めてその意味が理解されるものとなりましょう。その意味で、わが国における資本主義の確立がドイツのように近代的な国民国家の創建前でなく、後であったということは、決定的な意義をもつ訳ですが、こうなりますと、これはもう理論史でなく、経済思想史ということになってしまいます。

しかも、社会政策論は経済学の一分科として何らかの資本主義理論を前提とする学問ですから、輸入に始まり科学にいたるわが国社会政策論の発展構造いかん、という冒頭に申し上げましたような課題に応えるためには、日本資本主義の発展過程との対応関係の下にまずわが国における経済学の発展構造を捉え、これに重ねながら社会政策理論の発展過程を追跡せねばならないということになりますが、それは具体的には、当時の経済学者たちがその折々の問題意識に導かれてものした論文―著書ではなく、時事論的な論文―を、当時の政治的・社会的・経済的な状況や、わが国経済学の理論水準中に置いて、それら論文が提起した問題の意味を理解する、ということに外なりません。このため、私は仕事中、先学の業績

を殆ど顧みなかった訳ですが、一仕事終え、自分の仕事が果たしてどのような意味を持つのか、と改めて先学の業績―たとえば、杉原先生や内海庫一郎先生など―を参照すると、私が得意になって論じたり指摘したことがすでに指摘されている、といったことに屡々出会いました。この席をお借りして、心からお詫び申し上げる次第です。

以上が、この課題を解くためには構造的な視点・方法が必要だと先に申し上げました理由ですが、わが国に経済学が入って以来百年以上の月日が経つというのに、わが経済学界に、いまだ経済学史や社会政策論史がない―その意味で、住谷悦治先生の『日本経済学史の一駒』や『日本経済学史』は大変貴重、といわねばならないでしょう―という理由、日本経済思想史や日本社会政策思想史は在るが、それがないという理由は、恐らくこうした事情にあるのではないでしょうか。

私が河上博士の理論変遷の問題に首を突っ込むようになりましたのは、このような観点から、日本歴史学派経済学の生成・発展の過程を押さえ、その崩壊過程（大正前半期）を住谷悦治先生―先生が『日本経済学史の一駒』の中で、日本社会政策学会が「自然消滅」（大正十三年）したのは、a）マルクス主義の台頭を前にして社会改良主義の魅力が急速に失われていった上、b）研究者の関心が社会政策・統計学・理論経済学・その他へ分化したからだ、と述べられていること、すでにご承知の処と存じます―に教えられながら、①博士生涯の論敵・福田徳三の社会政策論再構築の途、②若くして逝った鬼才大西猪之介の近代経済学への途（博士は、この方の『帝国主義論』について簡単な論評を公にされています）、③博士の親友・河田嗣郎の国家社会主義への途、とほぼ追い終えた時でした。

大正後半期のわが国経済学の新たなる発展局面は、ごく大雑把に捉えますと、a）マルクス経済学が急速に台頭―博士は、その様子を大正十四年六月五日付の櫛田宛書簡の中で、「日本の学界は異常の進歩を最近に遂げた」と表現されていますが―し、b）これに対抗的に国家社会主義経済学（高畠素之・土方成美・高田保馬ら）が盛んとなって、c）その間を縫うように近代経済学への模索（東畑精一・中山伊知郎）が始まる、という三者鼎立の形に整理できる訳ですが、以上のような作業の結果、残るはマルクス経済学への途のみということになった次第です。

この場合、歴史学派から出て限界効用学派に移り、そ

こから更にマルクス経済学に転じていった河上博士の理論的変遷の過程、レーニンを導きの糸としてマルクス経済学の〈俗流的〉理解から〈科学的〉理解へと突き進んでいった博士の理論的営為の過程は、私にとりましては、真にこの上ない好材料—大変失礼ないいようですが—でした。歴史学派経済学→限界効用経済学→マルクス経済学というわが国経済学の発展は、研究者の世代的交替を通して発現したものでしたが、博士はその同じ過程を一人の人間の頭脳の営みとして歩んだ—あたかもあのマルクスが、己の頭脳の中で、ブルジョア・イデオロギーの残滓を清算しながらマルクス主義者になっていったように—訳ですから……、「輸入の学」＝歴史学派経済学から「科学」＝マルクス経済学へ、というわが国経済学の発展構造、その論理を押さえるには、申し分ない考察対象であった訳です。

このように「日本経済学史の上に占める河上博士の位置」は、総論としては、わが国戦前の経済学の発展過程、わが国マルクス経済学のマルクス＝レーニン主義としての確立過程の本流をゆくもの、とすることが出来る訳ですが、もっと具体的に考えたらどんな位置づけになるのか、話題を提供いたしたいと存じます。

まずその第一点は、河上博士が東京農科大学の実科講師として学界にデビューした、いわば研究者としての出発点（明治三六～三八年）において、いち早くご自身の理論的基底を、アメリカ制度学派の「新史観」—それは、アメリカの進化主義的な世界観とドイツの相対主義的な歴史観とがアメリカ資本主義の独占的再編過程の下で接合した、きわめてアメリカ的な世界観であった訳ですが—によって再構築したことであります。博士が学界にデビューされた明治三十年代後半という時期は、金井延や桑田熊蔵や田島錦治や松崎蔵之介といった人々によって接受されたドイツ新歴史学派の経済学、特にその社会政策論が急速にわが国土壌の上に定着して、わが国経済学の主流となっていった時期ですし、彼ら日本歴史学派創早期の理論家たちに経済学を教えられた第二・第三世代の研究者たちは、殆ど例外なくドイツに留学して社会政策を学んで来た（『東京大学百年史』）といわれるほどわが国経済学界がドイツに靡いていた頃ですから、そのような空気の中に在って博士がなぜアメリカに眼を向け得たのか、そのような条件が果たしてどのような形で当時の東京大学または日本にあったのか、不思議な気さえする訳です。不明にして私は、その理由をまだ明らかにし

得ていないのですが、とにかくそれが、デビュー当時の博士の特異な位置を物語るものとして注目すべき点であること、間違いないようです。

そのことは、博士が学界デビュー後矢継ぎ早やに発表された論著の中で展開された主張、そこに示された自由競争や社会問題や社会主義についての知見を、金井や桑田や田島といった当時の指導的理論家たちのそれと比較してみると、よく判るでしょう。

たとえば、論稿「第十九世紀の中葉に於ける経済界の変動」（明治三六年）の中で、博士は、一九世紀半ばに澎湃として社会問題が起こり社会主義が台頭して来る理由を産業革命との関連において捉え、かかる観点からわが国における社会問題の発生や社会主義の台頭が歴史的に必然的であることを指摘して、社会政策展開の要を説いておられる訳ですが、金井や桑田らのそれは、自由競争を「優勝劣敗ノ天則」と捉え、社会問題はこの「天則」の結果であるという、きわめて抽象的なものでしたし、社会主義に対する認識にしても、『社会主義評論』（同三八年）に見るように、博士のそれはまことに具体的で理解あるものでしたが、桑田らのそれは、「優勝劣敗ノ天則」にもとって絶対的な「経済的平等」を図る「荒唐無稽ノ説」、絶対的な「政治的平等」を主張するもので、「君主政体」を否定するという、きわめて観念的で高飛車なものでした。『社会主義評論』における博士の知見が、世人からきわめて斬新なものとして注目された由因、社会主義を批判しようと思うならば、まず社会主義の何たるかを知らねばならぬと、博士が金井や田島を揶揄した由因であります。

そこで問題は、「新史観」に基づく論理再構築がなぜこのように豊かな理論的成果をもたらしたかということになりますが、これについては、日本歴史学派はドイツ新歴史学派の日本版、アメリカ制度学派そのアメリカ版としばしばいわれておりますから、この三者の関係を押さえると明確になるのではないかと存じます。

(A) まず源流ドイツ新歴史学派の経済学ですが、これは、歴史・理論・政策を三位一体としたその学的体系—①ドイツ資本主義の後進的なる理由や程度を歴史的研究によって実証し、②これを理由に自由主義経済学のドイツへの適用を留保するかたわら、③後進性克服のための政策研究、後進性克服過程における政治の経済への介入を正当化する—が物語るように、後進ドイツ産業ブルジョアジーの理論表現として、すぐれて特殊な

経済学でありました。

(B) しかし金井や桑田といった日本歴史学派創早期の理論家たちは、この特殊理論をわが国にも適用可能な「原理」的理論として―ご承知の通り、維新政権はプロイセン型の立憲制度を範にわが国の近代移行を指導いたしました―接受したため、一方ではドイツ新歴史学派における政治の経済に対する相対的優位の関係を絶対的優位の関係として把握し（国家主義的視点）、他方では歴史的実証研究方法本来の意義を見失ってしまう（跛行的・原則論的な研究姿勢）という結果を招いてしまいました。

(C) これに対してイリーやセリグマンといったアメリカ制度学派創早期の理論家たちはさまざまな社会的弊害をもたらしたアメリカ資本主義の独占的再編過程に対する批判、これを媒介にした自由競争に対する反省とに基づいて、これまで信奉してきた社会進化論―スペンサー主義をドイツ新歴史学派の相対主義的史観によって修正いたしましたので、その史観、「新史観」には、ヨーロッパの合理実証主義的伝統（ダーウィンの進化論がその所産であること、お断わりするまでもないでしょう）と相対主義的歴史観が脈々と流れておりました。

ですから、博士がご自分の経済学をこのアメリカ制度学派の「新史観」の上に再構築されたということは、比喩的にいえば、ドイツ新歴史学派経済学の日本版の欠陥をアメリカ版によって修正したということ、天上にあった日本歴史学派の経済学を地上に引き下ろしたという意味をもつ訳です。博士の分析視点がすぐれてブルジョア的＝自由主義的なものであったのは、このためといって宜しいでしょう。

『時勢之変』や「日本独特ノ国家主義」や「政体ト国体」（明治四四年）といった論著に見られる博士の日本の国家主義に関する知見、『日本尊農論』（同三八年）で示された博士の日本農業論―国民経済論は、博士のそうした自由主義的＝ブルジョア的視点を物語る代表的な著作でありましょう。

ご承知のように前者では、博士は「日本ノ国家主義」を、「天皇を神の国の代表と見る独特の国家観」に基づいて、「国体と政体とを同一視」する「日本独特」のものと認識されることによって、かかる国家の下では、「言論の自由」も「研究の自由」も到底成り立たないということを見抜かれ、この国家主義に「無用有害の媚を

呈せんとする一切の論説、運動政策ないし制度に反対する」という姿勢を明確に打ち出された（『時勢之変』・「日本独特ノ国家主義」・「政体ト国体」、いずれも同四四年）―塩田庄兵衛先生は『時勢之変』における博士の論旨には大逆事件に対する博士の「こだわりが屈折した形」で投影している、といわれていますが―訳ですが、当時、大学教授の中でこれほど明確に日本の国家主義を捉え、これを批判した人がいたでしょうか。

また後者では、博士は、わが国の農業を最低生産費の原則が貫徹するような構造に改め、その上で農工商の調和的発展を図ること、それが日本国家の経済的独立を維持する基礎であるという主張を展開された訳ですが、戸田海市先生―この方が博士を京都帝大に推挽されたことは、ご承知のところと存じます―が、わが国の「穀価」が「豊凶ニ関係」なく「騰落」するという「経済法則ニ戻ル」運動をするのは、「地主階級」が小作制度の下で「強大な米価決定勢力」を保有しているからであるが、かかる「国内市場ノ不自然ナ成立」は、わが国が「対外競争上唯一ノ武器」とする「低廉生産費ノ原則」を撹乱するものであるから改めねばならぬという主張―戸田さんはこの問題を、かつてイギリスの「資本階級」と「地主階級」とが激しく対立した「穀物条例」の撤廃をめぐる問題、その日本版だと意義づけています―を展開された（「米価ノ騰落」）のが大正元年、博士の親友・河田さんが同じ問題を「穀物市場」に絞って論じたのが大正五年ですから、博士のこの主張はまことに早い訳です。

さて、第二点はあの絶対的非利己主義の問題であります。一般にこの点に関しては、プラスでなくマイナスに評価される向きが強いようですが、古田光男先生のように〝博士はこれを「公案」―古田先生の文章そのままにいえば「『貧乏物語』を公案として」ということになりますが、この時期博士の脳裏を占めていた最大の学問的関心は、『自叙伝』でいわれているように、絶対的非利己主義に基づく経済学を打ち樹てるという点にあった訳ですから、これを〈絶対的非利己主義を「公案」として〉といっても宜しいかと存じます―としてマルクス経済学に突き進まれた〟と積極的に評価される方もおられること、ご承知の通りであります。

しかし、ここでは古田先生のように総論的にではなく、もっと具体的に、つまり、絶対的非利己主義の真理を経済学の上に理論化するという試み、その成果を、わが国経済学の発展という観点から見たらどういう意味を持つ

か、ということを考えて見たい訳であります。

たとえば、あの有名な『貧乏物語』（大正五年）はどうでしょうか。ご承知のように博士は、この貧乏発生の根源を「分配」にではなく「生産」に求められました。有効需要という概念を持ち出し、社会の需要総額を大きく「奢侈需要」と一般庶民の「生活必需品」に対する需要とに分けた後、社会の生産力は有効需要の大きい前者に向けてシフトしながら均衡点に達する、この社会的生産力の「浪費」、これが貧乏発生の原因だ、というのがその論理でした。ですから、ここでは「搾取」とか「剰余価値」だとかいった問題はまだ全く論じられることがありませんでしたが、とにかく「貧困」を利潤獲得のため「奢侈需要」に向かってシフトする資本の運動、その意味で資本主義的な「生産」秩序の問題だとされた博士の見解は、まことに卓抜したものであったといわねばならないでしょう。何しろ当時は「貧困」を「分配」秩序の欠陥によるとするのはまだしも、本人の「怠惰」によるとするのが支配的・一般的な見解だったのですから……。特に社会政策を科学的理論なるもの、それを爾余の社会政策論と分かつ一つの重要な理由が、資本の「直接的な生産過程」を「剰余価値」の生産過程として明らかにする点、そこに労働問題や労働運動発現の物質的根拠を見出す点にあったことを思うならば、博士のこの見解は、資本の運動を問題にしたという意味では、その入口に立ったものと評し得るように思う訳です。

もう一つは、博士が『近代経済思想史論』（大正九年）—これは、後に櫛田民蔵に批判された『資本主義経済学の史的発展』に集大成されてゆく訳ですが—において採られた方法であります。「貧困問題」解決の思想—人道主義経済学の系譜を、マルサス『人口論』の第二版から出発してモリス→ラスキン→スマート→ミルと辿り、その先にマルクスを置くという方法は、さながら最初に申し上げましたあの理論史的な考察方法—最も科学的と思われる一つの理論を措定し、過去の経済諸理論を、これに向かって自己完成的に発展して来たものとして整序する—を思わせるものでして、そのような方法を、やっとマルクス経済学が研究され始め、近代経済学への模索が始まろうかといった時期—たとえば、遊部久蔵『「資本論」研究史』によれば、わが国で『資本論』の翻訳が初めて出たのは大正八年とのことですし、玉野井芳郎『日本の経済学』によれば、わが国の近代経済学の『開発』に大きな役割を果たしたシュンペーターの来日は昭和三

年だそうです—に、博士がこのような方法の下に経済学史を回顧されていることは、驚嘆に値するといって宜しいでしょう。

当時、このような方法で経済学史なり経済思想史を顧みた人、あるいは業績があるだろうかと、あれこれ思い巡らしたのですが、不勉強のため思い当たりません。ご教示いただければ、と存じている次第です。後年『資本主義経済学の史的発展』が櫛田民蔵さんから批判された際、博士は、櫛田さん宛の書簡の中で「思想史の創作—歴史は一つの創作だと思うのですが」と些か不満げな様子でしたが、博士が「創作」といわれた意味は、ここにあったのではないでしょうか。

絶対的非利己主義に関する最後の問題は、方法問題に対する博士の省察の仕方であります。『自叙伝』で述べられているように、博士は「再び経済学研究の世界に立ち戻って」以後、絶対的非利己主義を生活実践から理論実践の領域に移し、方法問題に沈潜された結果、限界効用理論に『価値決定ノ真相』を見出し、ご自分の資本主義分析の視点を限界効用理論の上に確立—『経済原論』（大正二年）が、それです—いたします。経済学を自然科学のような「精確科学」として再構築し、「貧乏問題」の解決策＝社会政策をその一分科として確立する、というのがその目的であった訳ですが、社会政策を政策科学として確立するためには、社会政策の必然性を特殊・限定的に導出したドイツ歴史学派の相対主義的な歴史観—ドイツの特殊後進性を説明するために案出された例の歴史的発展段階説がそれですが—に代わって、社会政策の必然性を普遍・一般的に導出し得るような歴史観、そのような歴史法則が必要になって参ります。特に博士が考えられた社会政策は、絶対的非利己主義という宗教的ではありますが、一般的な倫理的命題に基づく社会政策でありますから、これは尚更です。

博士が、方法問題を演繹法と帰納法の関係いかん、というきわめて抽象的な次元において省察される一方、マルクスの「唯物史観」を「歴史の自然科学的研究法」という観点から取り上げ、その「公式」＝「歴史法則」が「理論法則」と豪も背馳しないことを確認して、「歴史の科学的研究者」として「唯物史観」を取る旨宣言された（明治四四年）のは、まさにこの故に外なりません。博士が「唯物史観」を「経済的唯物史観」と呼ばれる由因ですが、問題は、いま申し上げたように博士の方法省察

の仕方がきわめて抽象的な次元のものであり、徹底的なものであったということでした。

と申しますのは、博士が方法省察に沈潜されていたこの明治・大正交替期の頃は、わが国経済学界においてもようやく方法問題が取り上げられるようになった時期でしたが、その多くは、日本資本主義の帝国主義的発展の問題をきっかけとしたものでした。たとえば福田博士は、ご自分の資本主義理論＝『経済学講義』をマーシャルの『経済学原理』に拠って全面的に改訂（大正二年）された後、リッカートの「文化価値説」に基づいて「生存権ノ社会政策」を提唱（同五年）された訳ですが、その理由は、「欲望充足主義の経済学」では競争から独占へと発展する資本主義の運動は解明できないというものであり、それまでの潜在化してきたわが国の失業問題が、日本資本主義の独占的発展によって顕在化したことでした。博士が方法問題についてこの福田さんと論争されたことは、ご承知でしょう。また、河田先生も同様にご自分の理論基底をマーシャル『経済学原理』の上に移された（明治四二年頃）後、イギリスの産業社会主義に拠って社会問題を論じられました（明治・大正交替期）が、その理由は、河田さんが日本資本主義の独占的発展によって浮上した一般庶民の「生計費問題」―「中等社会政策」に大きな関心を寄せていたからでした。この河田さんは、高田保馬さんと方法問題について議論されております。

さらに、前にちょっと触れました大西さん―この方の方法省察は、徹底的という点では群を抜いておりました―も「経済学ハ囚レタリ」という方法問題に関する長大な論稿、有名な論稿を発表（同二年）された後、「自然科学トシテノ経済学」と「人文科学トシテノ経済学」の統一を主張（同七年）されましたが、その主な理由は、日本資本主義の帝国主義的発展の下で半封建的地主階級・資本家階級および労働者および小作人階級の間に利害の対立がも早や否定し得べくもないほど歴然たるものとなり、古典派経済学・マルクス経済学に代わる新たな中立的な経済学を樹立せねばならぬ、というものでした。この大西先生に『帝国主義論』という著書があることは、前述したところですが、方法問題のもつ本質的な意味をよく最もよく理解されていたのは、この先生ではないか、と思っております。

つまり河上博士の方法省察は、徹底的という点では大西さんのそれに匹敵するものでしたが、帝国主義の問題、日本資本主義の独占的発展の問題に触発されたものでな

いという点において、まことに特徴的なものであったといわねばならないと思う訳です。

最後は、櫛田さんや福本和夫氏の批判に発奮した博士のマルクス経済学への旋回過程がマルクス＝レーニン主義への旋回過程であった、ということであります。いうまでもなく博士のこの道行きは、先に申し上げましたように、マルクスの著作より先にあれこれの俗流的なマルクス主義理論が導入され、展開していた、というわが国経済学の転倒的な発展構造と密接に関連するものであり、したがってまた、わが国におけるマルクス経済学の科学的定立の過程でもあった訳ですが、実はこの道行き、レーニンに導かれてマルクス経済学の科学的理解に到達するというこの過程は、なぜレーニンが『ロシアのおける資本主義の発展』や『帝国主義論』を著わさねばならなかったかという理由、あるいは、なぜ『帝国主義論』の中でカウッツキーやヒルファディングの所論を批判せねばならなかったかという理由が物語るように、実は、ロシアにおけるマルクス経済学の科学的確立過程と本質的には全く同じ道行きであった訳です。

そして今日この問題は、「ベルリンの壁」の崩壊を契機としたソ連体制の瓦解という形を採って、マルクス・レーニン主義とは何であったのか、という問題を改めて提起している訳ですが、日本マルクス主義の科学的定立の過程を上のように捉える限り、マルクス・レーニン主義の再検討という問題は、同時に即日本マルクス主義の再検討という問題となって参ります。この意味において「日本経済学史の上に占める河上博士の位置」を確定するという問題は決して過去の問題ではなく、すぐれて今日的な意義をもつ問題でもある、といわねばならないでしょう。大変難しい問題ですが、マルクス経済学を採る者にとっては、この問題は避けて通れない問題であると考えている次第です。

さて、私が本日提供申し上げたい話題、その主なものは、これでほぼ終わる訳ですが、以上の話題に関連して、レジュメの「その他」ということで申し上げたい点は、先ほど方法省察のところで申し上げましたように、博士には独占資本主義または帝国主義論についての論著がないということであります。

ご承知のように、博士は「貧乏物語」の中では、イギリス議会に対するロイド・ジョージの「児童給食公給制度」や「養老年金条例」の提案理由に触れたり、第一次大戦中のドイツの統制経済を考察したり、付録にセーリ

グマンの「現戦争の経済的説明」を収めてこれを論評するなど、帝国主義の問題に踏み込んでゆく機会には遭遇するのですが、残念にも「貧乏撲滅戦争」という観点のためにその真の姿を見抜くことが出来ず、統制経済は「生産力の社会的浪費」に対する国家の介入で「国家社会主義」とも称し得るもの、「資本輸出」は「貧乏人の要求に応ずる事業に放資する」より「海外未開地の新事業に放資する方が儲けが多い」からだと理解してしまいます。

これが絶対的非利己主義のもたらしたマイナス面であること、いうまでもありませんが、問題は、このために博士がせっかくレーニンのロシア革命論――「露国現時の経済的地位――レーニン」がその最初のもので、これ以降、博士はロシア革命の研究を通じて急速にマルクス経済学へ傾斜していった訳ですが――に触れながら、彼の『帝国主義論』や『ロシアにおける資本主義の発展』を繙かなかったということでした。この結果、博士はレーニン主義を経済主義的に解釈してしまう訳ですが、博士が福本さんの批判に反論するまで一年近い日数を要したのは、このためではないかと思うのですが、レーニンを読みながらレーニン主義を知らなかった――比喩的な言い方で恐縮ですが――というのが、この時期の博士の姿ではなかったか、と考えている次第です。

以上が、本日私が提供申し上げたかった話題でございます。ご清聴まことに有難うございました。（拍手）

（本稿は、過日の講演要旨に加筆・補正を施したものである）